

憧れの無人島

20期 久富 象二

能登半島の入口あたりの中島町に瀬嶺という町があるのをご存じだろうか。七尾湾につながる波の穏やかな入江に面した半農半漁の小さな町である。

この瀬嶺から船外機付きの船で約20分くらいの所に種ヶ島と机島と呼ばれる二つの小さな島があるのをご存じだろうか。万葉集にも登場し、また皇族のナントカ宮が孔雀（七面鳥であったか）の飼育の様子を観察に訪れたりした、それなりに由緒のある島である。が、様々な歴史と変遷を経て、現在はとにかく無人島である。

私が語りたいのは島の歴史や変遷ではなく、この二つの島のうち机島が、一時期私達の絶好のリゾート地であったことである。

話の発端は、我が社の労働組合の執行委員会が終わった後の飲み会である。同僚のM氏が語るには、中島の沖に無人島があって、そこに別荘があるというのだ。その別荘は東京在住のとある会社の社長の所有で、気の向いた時にフラッと来る。普段の管理は、瀬嶺に住むこれまた同僚のT氏が任されていて、社長が来る時以外は自由に使って一向構わないことになっている。その別荘は井戸を掘って水道が引かれていて、自家発電で電気も大丈夫だという。そこまで話を聞いて私は気持ちが昂るのを覚え、是か非でも行かねばならないと思った。

行動は素早かった。私は労組の執行委員を中心にメンバーを募った。曰く、

「無人島へ行こう！」



執行委員会の出口の見えない議論に飽きかけていた者には刺激的であつたらしい。メンバーの合意はすぐに形成された。日程表と食料計画を作りファックスで流した。準備はさしたる苦勞もなく整った。出発したのは快晴の夏の日。そう、あわもり喬が参議院選に当選した、それなりに意味のある夏だった。

瀬嶺へ向かう途中、七尾のスーパーで食料の買い出しをした。10数名分の食料の買い出し表を手渡し、買い漏れをチェックする私の手際は仲間から、「さすがワンゲル。」とお誉めをいただいた。

T氏の船で島へ向かった。波しぶきが心地良かった。島は周囲2kmくらいであろうか。ちゃんとした船着場があり、船着場から草地の傾斜を少し登った所に別荘はあった。別荘から荷物を運ぶための滑車が引かれ、台車がぶら下がっていた。

「別荘」といっても外観はごく普通の民家である。しかし、中に入ってみて驚いた。キッチン、ガスレンジあり。もちろん外にはプロパンガスのボンベが据えられている。大型冷蔵庫あり。中には日付不明のビール4、5本。ダイニングにテーブルあり。おフロあり。ポータブルテレビあり。七尾湾が目の前に広がる縁側あり。8畳間二つ。不自由する要素は何もない。テント生活を思えば豪華すぎる。

私達は、皿とコップを洗い、ビールを冷やし、床とテーブルを拭き、部屋を掃き、おフロを洗い、こまめに働いた。一通りの仕事を終えた後、七尾で仕入れたイカの刺身で乾杯した。

乾杯の後、船で釣りに出た。魚がいない筈はないのだが、私達に釣られる魚はいなかった。同志社で水泳をやっていた一人が、竿を放り出してフリチンで泳ぎだした。

釣りから帰ってご飯を炊いた。ガス炊飯器が備えてあったので、4年間ホエプスの飯炊きで鍛えた私のにかかれば、出来映えは完璧であった。カレーを作った。玉葱を充分炒め、にんにくを効かせ、トマトも入れた。角瓶をすすり、

持って行ったカセットでラリー・カールトーンを聴きながらじっくり煮込んだ。ラリー・カールトーンのギターには時を止める力がある、そう思ったりした。

夕食はカレーと定番、焼肉であった。予定では釣れた魚がどんと出る筈であったが、釣れなかったものはしかたがない。夜釣りにも出掛けしたがやはり釣果は今一つであった。だが、暗い海の向こうの和倉温泉の灯がきれいだった。

結局この無人島へは3回行った。執行部バンドを結成するのだと意気込んでギターを持ち込んだこともあったが、酒の酔いのせいかチューニングだけで疲れ果ててしまった。最後となったのは翌々年の1月であった。その後この無人島で2泊3日の「厳冬期合宿」を計画していたのであったがそれは不可能になった。もう無人島へは行けなくなってしまったのである。管理の仕事がT氏から別の人に移り、またT氏も地元へ進出してきた企業へ転職してしまったからである。私はT氏との関係が途切れてはならないと思い、年賀状やお歳暮を送ったりと努力はしたのであるが、結局は疎遠になってしまった。

この無人島に代わる場所をと2、3探してみたり、実際に行ってみたりしたが、いずれも無人島ほど気持ちの昂りを感じさせてくれる所はなかった。いっそのこと、あの無人島を買おうかと同僚達と相談したことがある。1坪500円として……。無理なのである。買える筈がない。定年まで払い続けてまだ残高の残る住宅ローンを抱えていて、そんなお金どこから出せるものか。

電気もつくし、水も出るし、おまけにタヌキまで出る。

でも簡単には行けなくて、もし海が荒れたら何日も帰れない。

また行きたい。ああ、憧れの無人島！



<解説>

ワングルOB会報初の文芸(?)作品は以下の経緯で掲載された。この経緯を知るか知らぬかで、この作品の理解は異なってくるものと思われる。(この解説が「いじっかしい」人は素直に作品のみを味わって下さい。)

35周年記念誌の発行により、バラバラに見えたワングルの歴史は剥ぎあわせられ、経年変化を俯瞰できるようになった。

某女史は一応理学部出であり、生半可にかじったにもかかわらず、データーを見れば、解析・考察を試みずにはいられない。そして、彼女は「ワングルは何故衰退(部員減少)したのか」の疑問の答えを歴年のBH誌の記述の中に見出だそうとした。20期をピークに「減少」は始まっている。3Kを嫌う傾向が増したにせよ、何か重大事故が起きたのか(否。事故は却って部員の結束を強める)、著しくワングルの品位を貶めた人物がいたのか……思い当たったのは、この頃、執行部の任期が変更となったことであった。

おりしも、役員会には20期久富氏がおり、彼女は「生き証人」である久富氏にカマをかけてみたのである。人を疑うことを知らぬ彼は、「何年か前、飲み会の帰りに、ばったり前田先生にお会いしたんですよ。」

<この頃ワングルはどんな具合ですか?>

と聞くと、「減りっぱなし」という返事。

そして

<あんたらのせいや。あんたらがシステムを変えたから、上級生が出てこんようになって、活力がなくなってしまったんや。>

と云われてしまって……

と、告白した。ひそかに気に病んだ彼は、そのために、中年太りと緑のない体になっていた。

「やっぱり！」

と女史はほくそえむ。有力な証拠を得た彼女は「4回生を役職から外した結果、4回生が出て来辛くなり、それが、我関せずの風潮を助長したのであろう。しいては部の伝統が伝わらなくなり、魅力も損なっていたのだワ！」

と勝ち誇る。その後彼はくウォー、組織なんて…もう嫌ダ！>とストイックなマラソンにのめりこんでいったようだった。

この論戦は、ご多忙の久富氏、一応主婦の女史ということで一向に展開せず、「月見の宴」に持ち越されていた。

しかし…ワンゲルの「聖域」BHにあっては、いかなる不協和音もかき消されてしまう。同じ時代を共有したことの無い兩人であったが、双方ワンゲルの美酒に酔いしれてしまった。しかも彼の作るBH横の沢水による水割は、絶品なのであった。「和解」の道しかそこには残されていなかった。

「その時には、自分達が画期的と思ってやったことが、実は時代の大きな流れの中での必然的な変化だったのだ。自分達がやらなくても、次の何期かにはやられていたに違いない。もし思いつきに過ぎないことであれば、次にはゆり戻されているはずなのだ。その時には極端で、歴史がとげとげに角張ってつながっているように思えても、実は否応無しの変化の中にワンゲルも変化し続けているのだ」

「ではワンゲルとは何だったのだろう？」
そこへさらに論客が加わり、酔うほどに、過去のあの時のこだわり、あの時口には出せず、ただ見守るしかなかった思いなども暴露されて、皆もう、ワンゲルを選んでよかったという思いで一杯になってしまった。

「ワンゲルとは、自然を愛すはもちろんだけど、その前に<人を愛し>が入るんですよ」

「異議無し！」

で、その夜は暮れてしまった。



しかし女史は執拗であった。彼女の頭には、すでに四十周年があり、丁度真中の期にあたる久富氏は、基調演説をさせるに格好の人材に思われるのであった。

もう解決済と思っていた彼は、原稿依頼に驚きながらも、書かねば女史からは「解放されない」とここに観念した。持久戦に持ち込んでも体力負けすることは明らかなのであった…。

予告どおり期待を裏切らず、遅くなりました。すみません。

原稿の内容ですが、月見の宴については沢山の方が感想を寄せて下さるでしょうし、クラブのシステムを変えた云々については次の理由でパスさせていただきました。

・僕達が現在のシステムにしたのは、クラブの活動のメインは合宿であり（特に夏）、そのリーダーをやるのは3年生である。活動の中心を担うのが3年生であるのに、方針を決める執行部を4年生が務めるというのは構造的に不都合だ、というような理由からだったと思います。

この理由は是非はともかく、僕らは僕らなりの議論をしてそれまでのシステムに弊害を感じシステムを変えたのだから、現役の方達も現役のシステムに弊害を見出しているのなら、それは手順を踏んで変えていけばよいのであって、今僕が現役の方達に対して論じることがほとんど無いように思われます。

・現役の方達には、不都合を排し、自分達の思うような形にクラブを変えていかれることを願っています。僕達もそうしてきたのだし、先輩方もそうしてきたことと思っています。

それで、原稿は今一番書きたかったことを書かせていただきました。OB会報に相応しいかどうか、読んでいただいて、分かる方には分かるだろうと思いますが、如何か。

帰省中、千葉の
会社員が水死
立田村の木曾川
十二日午後三時十分こ
ろ、愛知県海部郡立田村福
原の木曾川（川幅三百三十
びで、千葉県我孫子市つ
くし野四、会社員、横井昭
次さん（右）が、右岸から六
十びの深みにはまっておぼ
れた。約三十分後に水際一
・八びの水底に沈んでいる
のが見つかったが、間もな
く死亡した。死因は水死。
津島署の調べでは、横井
さんは五日から、家族五人
で同郡佐屋町の奥家へ帰省
中。この日は友人の家族ら
と計十一人で川遊びをして
いた。横井さんは正午ごろ
から、右岸から八十び離れ
た中州で、二女さんと友人

の長女さんの三人で遊んで
いたが、潮の變化で水位が
増して危なくなり、友人に
子ども二人を預けて自分も
岸に戻る途中、行方が分か
らなくなった。

新聞【8月13日】

横井 昭次さん水死

横井 昭次さん（15期）は8月12日ふるさとの木曾川で不慮の死を遂げられました。

それはお盆の帰省中のことで、アドレス帳が手元にない状態のため、友人関係への連絡が不可能でした。たまたま翌13日の朝刊で記事を見た16期川端さんより、15期佐野さんへ連絡が入り、緊急連絡が回ったものです。お盆時で連絡に手間取りましたが、15期を中心にワンゲルOBが参列し、彼の柩を送り出すことができました。

その後15期連絡員の坂尻さんがよびかけ、追悼文集を作成することになり、彼の尽力で完成。夫人の裕子さんにお届けすることができました。

緊急連絡にあたった佐野さんからも、名古屋での新聞コピーが送られ、葬儀の時の模様が伝えられました。

横井さんは、前回の同期会の幹事を務めており、その下見の時に木曾川を渡りながら「この川は、僕が小さい頃から泳いで親しんできた川なんだよ」と語っていたことも、今では辛過ぎる思い出になってしまいました。

追悼文集の彼の死を悼む名文の数々は、皆掲載したい所でしたが、会報掲載期が偏ることを編集長は気にしており、割愛することにしました。

*横井さんのBH13号掲載文

*横井 裕子さんからのお便り

（10月15日付け 掲載をご了承いただきました）

*横井 裕子さんへの応援会（白山会）を結成

の以上3点を紹介します。あらためて横井さんのご冥福をお祈りします。



死に寄せて

15期 横井 昭次
（BH13号より）

月日の流れて行くのは、真に速い。人が去ってからの時間は、更にまた速く流れていた。それは、その人の死があまりの突然であったからか、あるいは彼が私と深く関わっていなかったからか。〈彼〉と呼んでしまったのでは、いよいよ遠ざかってしまう様な気がする。せめて〈奴〉と呼ぶことにする。そうする事が、やがて私の記憶から消えてしまうであろうかもしれない死んでしまった奴と、いまだに生きている私の仲をつなごうと思う。それは所詮、死んでしまった奴と、生きている私とのあまりの隔たりに対する、生きている私の側からの後ろめたさの表われであり、又、一つの「事件」に関わっ

たということから来る、いささかの昂りを感
じた私の後ろめたさの表れである。

こんな話を耳にしたことがある。自分の家の
隣に盗人が入った時、彼にとって、その盗人へ
の恐れ、あるいは憤りよりも、自分の生活圏内
の中に、自分の身近に、盗人という<異常なも
の>が割り込んできたという事の方が、より関
心を抱かしめるであろうという事を。隣の家に
盗人が入ったという事が、彼にとっては、一つ
の自慢話の様にして語られる事であろう。それ
と全く同じ心の昂りが、一人の人間の死という、
あまりに<異常なもの>が私の眼の前で起こっ
て以後、私の心の中にあった事を懺悔しなけれ
ばならない。あまりにも異常なもの=死が、こ
の私と関わりを持ち、（それは皮相的なもので
しかなく、いかに私が一人の人間の死に関わ
り得たか。やはり「死」が「事件」でしかなか
った）しかもその関わり、この私が独占した事
（私は彼と同じパーティーのメンバーであり、
更に、彼が単なる物質と化していく様を最後まで
見続けねばならなかった。）を。やはり、「
自慢の種」として心の中に丸め込んでしまっ
て居たのである。そうであった私にとっては、あ
の地で黙禱を捧げる事も、花を献げる事も、そ
れが私以外の人によって成された場合、しらじ
らしく私は思っていた。私は恥ずかしい。私は、
祈るよりも、祈りを捧げている者達の心の中を
探る事に忙しかった。そして一方、自分にとっ
てもまた、私以外の人にとってと同様に、死ん
だ奴が遠い存在である事が解れば解る程に、即
ち、この私が私以外の人間と同じであるという
事が解れば解る程に、私と私以外の人間との差、
それは私が独占し得た彼の死ぬとのより深い関
わり（それは、彼の死をまのあたりに見たとい
う事だけなのだが。）なのだが、それが私にと
ってはいよいよ大事なものになってしまった。私
は私以外の人間と同じになってしまう事を恐レ
た。

私は誰に対しても恥ずかしい人間でした。

四月X日

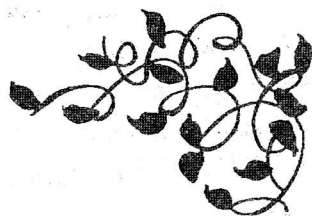
先日の山小屋作業（高三郎田道整備）の時に、
一年前の新トレで桂君と並んで座った地点に腰
をおろした。あの時彼は元気な様に見えたのだ
が、あそこで我々は、あの時レーズンを口にし
た様に思う。本当に苦しさを分け合った仲間同
士だったのに。彼の葬儀が終わった後で、ダム
の傍らの桂君が倒れた所にご両親と妹さんか行
かれた時、お母さんと妹さんが泣きながら、そ
の場の花を摘んで手に固く握られたのが忘れら
れない。

十一月Y日

僕は初めて知った。遠くから冷たい言葉でも
って、一人の人間の死を見ていた人の中に、執
念深い悲しみがあったことを。僕のヒステリッ
クなセンチメンタリズムは、必死になって己の
感情をかきたてようとあかいている、愚かな傍
観者のものだったのです。残されたお母さんの
慟哭に、思わず涙を禁じ得なかった。その心に
嘘などはなかったが、その感情の隙間に、すぐ
いとわしい想念が知らず知らず頭をもたげてし
まっていたのです。

僕の中で桂君の面影が薄れていくだけでなく、
彼の死そのものがまさしく風化していく時、僕
は一人の人間の死を今なお、執拗に心の中に背
負い続けて居る人を見たのです。

十二月七日



横井 裕子さんからの郵便

（10月15日のもの）

いつのまにかすっかり周りは秋になり、コス
モスは満開になり、外ではいろいろな虫の音が
聞こえています。あの暑かった夏がどんどん遠
ざかっていきます。

追悼文集をお送りいただきましてありがとうございました。丁度2ヶ月目の10月12日に届きました。主人の写真の前で読ませていただきましたが、皆様のお気持ちがうれしくて涙が止まりませんでした。翌日、眼と鼻がズキズキ痛むほど泣いてしまいました。

通夜、葬儀ともに、突然の知らせだったにも関わらず、大勢で来ていただいて、本当にうれしかったです。でもあの時は、自分が自分でないような状態でしたので、皆様とどんなふうにお話したのかさえよく覚えておりません。あの後27日忌が過ぎるまで佐屋にとどまり、我孫子へ戻ってからは、又、たくさんの方々にお別れをいただき、49日忌を過ぎるまではただただ毎日を過ごすのが、やっとという感じでした。

ようやく最近になって、まわりはすっかり秋になり、言葉では表せないような淋しさに取り囲まれているのに気がつきました。誰かと話をする時に悲しくても、笑顔でつい元気そうにしてしまう自分がイヤでしたが、ようやく素直に涙が出るようになりました。今までで一番悲しくて泣き虫になっています。子供達の前では泣かないようにしていますが、いつもそばにくっついてくる三女にはすぐ見つかってしまって困っています。

もし、私が一人きりだったら、きっと一日中何もせずにただぼんやりとするばかりだったかもしれません。子供達がいるから早起きして、ごはんもお弁当も作るし、掃除もする。運動会ではカメラを持って走り回り、幼稚園のお誕生会にはおしゃれをして出かけていく…。こうやって、時がどんどんたっていくのでしょうか。

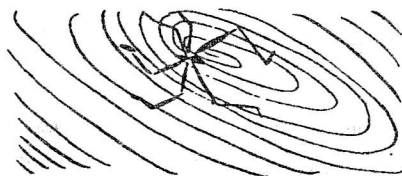
もう2ヶ月以上が過ぎたのに、まだ自分の中では主人の死を認めたくない気持ちで一杯です。どこかへ出張に行っているような気がします。それと同時に以前よりもそばにいたような気がします。帰りが遅くて、いつも夜中と朝しか一緒にいられなかったけれど、今はずっと一緒にいるように感じます。きっと皆さんからの文集も一緒に読んでくれたと思います。本当にありがとうございました。

8月12日のあの午後のことは思い出したくないことですが、坂尻さんをはじめ、ワンゲルの方への伝わり方は少し事実と違っているようなので、ここに訂正させていただいてもよろしいでしょうか。あの瞬間を目撃したものはごく僅かですので、本当のことは私にもわかりませんが、皆様にはなるべく事実に近い事を知っていただきたいのです。

新聞の記事にも、中洲にいたのは3人とありますが、本当は、友人の長男、長女、我が家の長女、次女の5人で泳いでいました。私と友人は川岸に近い所でお互いの末っ子を遊ばせていました。その日は久しぶりに再会した友人一家と話がはずみ、楽しくて楽しくて時がたつのも忘れていたほどでした。でも、ふと時計を見ると、もう午後3時を過ぎており、もうそろそろ帰ろうと主人に声をかけました。

「もうあがるよ」

という主人の声に安心して、私と友人は岸に上がりました。私がふりむいた時、主人の頭のまわりに4人の子供達の頭が集まっているのが小さく見えたので、そのあとすぐ来ると思っていました。たぶん、そのすぐ後に事件はおきたのだと思います。



友人の長女と我が家の次女は少ししか泳げないため、深い^所を渡る時は主人が2人を抱きかかえていました。その時もそうしていたようです。ところが、行きと違う所を渡ろうとしたその場所が、主人でも背が立たないほどの深さだったようです。主人一人なら決して溺れません。しかし、両腕に子供がしがみついた状態で足もつかず、本人はどんなに必死だったろうと思うと、こちらまで胸が苦しくなります。そんな状態だったのに、主人はあわてている友人の長男に「おじさんの腕につかまれ！」と叫んだそうです。でも、その子は主人がそん

な余裕はないことがわかっており、我が家の長女と必死に泳いで岸についたのです。

主人は、近くの人か抱えている子供達を受け取ってくれた後、力尽きてもぐってしまったようです。長女が大声で

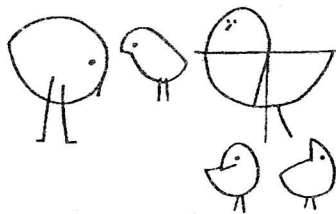
「助けてえ。お父さんがもぐっちゃった。死んじゃう！」

と走ってきた声を聞いて、私達が走って行った時には、もう主人の姿はどこにもありませんでした。3人の子供達が泣きながらそこにいるだけでした。つまり、主人の最期は子供達だけが見ているのです。特に2女は、その様子をまのあたりにしているのです。最後にお父さんは何と言ったのか、どうしてまわりに助けを求めなかったのか、どんな風に沈んでしまったのか――私には知りたい事ばかりです。でも、あまりに現実過ぎて、いまだにあの時の詳しい状況は聞

けないままです。子供達があの日ポツポツと話した事だけをつなぎあわせて、私が想像したにすぎません。いつの日か、娘が自分から話した時に聞いてみようと思っています。

もしかしたら、5人の葬式になっていたかもしれない事故でした。必死に、文字通り命をかけて、主人は子供達を助けてくれました。子供好きな主人らしい最期だったのかもしれない。

助かった大切な命を、今度は私が育てていかなくてはと思っています。くじけてはいられないと思います。「白山会」の皆様が応援して下さい。どうぞ15期会をはじめワングルのお友達によりしくお伝え下さい。本当に心の中は感謝の気持ちで一杯です。文集は私の宝物にさせていただきます。



よびかけ

故横井昭次君遺児への励まし基金について

あの横井昭次君が、去る8月12日15時30分頃帰らぬ人となりました。

突然の訃報で、残された妻裕子さんや、美奈子ちゃん（10歳）、志穂子ちゃん（8歳）
悠希子ちゃん（5歳）に慰めの言葉も有りません。

横井君の無念を思うとき、万感迫るものがあります。

「おい、横井君！私達に何が出来来る？」と問いかけるとき、残された4人の名前を
大声で呼ぶ彼の姿が浮かんで来ます。

子供が大好きだった彼、飲みながらお子さんの事をよく聞かれました。

今、私達が出来る事。

せめて、生前横井君と関わりがあった私達が、「お父さんには、たくさんの友達がい
て、みんなが応援しているよ」と残された子供たちに、Sprecher.
(シュプレヒコール)を贈りたいと思います。

左記の要領でご賛同頂ける方を募ります。

記

（呼びかけ人）

童話作家

伊藤 喜郎

くもん出版

中城 正嘉

くもん出版

赤石 忍

公文教育研究会

久保 輝也

表現研究所

伊藤 安一

金大法文部

山下 義信

金大外語部

宇野 潔

（応援名簿）

応援名簿を作成します。

（励まし基金）

残されたご家族のこれからを思うとき、言葉によるなぐさ
めも大切ですが「実生活に少しでも役に立つこと」として、
私達の気持ちを応援金として贈呈したいと思います。

・1口 1,000円

（親しかった人 5口以上でお願い出来れば幸いです。）

・目標額 100万円

・応援金は、各呼びかけ人にお渡し願います。（又は、左記の口座）

・応援金振込口座「あさひ銀行蒲田支店 横井君応援金 宇野 潔

（ヨコイケンオウエンキン ウノ キヨシ）1060392

・募集期間は9月14日までとし、四十九日の9月24日には裕子さんに
渡したいと考えています。

・一人でも多くの方のご賛同が得られることを祈っています。

（文責 宇野 潔）

連日の猛暑にも朝夕の風を感じる今日この頃です。子供たちも2学期が始まります。

さて、突然の連絡ですが(15期は、周知の事実ですが)我々15期の横井昭次君が、去る8月12日15時30分頃、帰省中の名古屋で不慮の事故で帰らぬ人となりました。

妻裕子さんと、美奈子ちゃん(10歳)、志穂子ちゃん(8歳)、悠希子ちゃん(5歳)の3人の子供が、残されてしまいました。

我々15期にとっては、桂、高村、比田井(石田)に次ぐ訃報であり、さみしさを通り越して、非常なショックとしか言いようがありません。

学生時代及び社会人になってからの15期会(ほぼ皆勤だったはず)と、思い出は尽き無いものがあります。

新トレでトップを歩きながら、後ろを振り返り、遅れ気味のメンバーを気づかいながら歩く横井。

あの白山の南竜で、時間を忘れて「星」を見ていた横井。

金も持たずに、後輩を引き連れて、兼六園下の飲み屋に繰り出した事もあった。

出版会社に勤めてからは、「こどもたち」の役に立つ本を目指して頑張っていた。

相手の話を、本当に一生懸命、聞いてくれた横井。

一人倍の「正義感」と「思いやり」で他人に接していた横井。

横井が「死んだ」!!!

葬儀の後、美奈子ちゃんに「がんばって」と声をかけた時、「ありがとう」といきました。と健気に返事した姿が忘れられません。

子供が大好きだった横井。あとけない3人のお子さんを思う時、今後の人生に何か励みになる事をしてあげたい。

横井の無念さを、少しでも和らげることが出来たら、そんな思いで応援名簿と応援金を募る事にしました。

彼にとって、金大ワンゲルの友達、かけがえのない仲間でした。そんな彼の残された子供達に、我々金沢大学ワンダーフォーゲル部の仲間としても是非、応援名簿に名前を連ねたいと思います。

(手続き)

・ 応援金を、銀行振込(別紙参照)か私(宇野)宛に送って下さい。

・ 応援金送付者名(関係、氏名)を記入した「応援名簿」を作成します。

・ 別紙にもある様に、9月14日迄にお願いします。

金大ワンゲルの名前で、多くの応援者が名簿に載る様、ご協力お願いします。

(15期へ)

過去の2名(高村、石田)に対し今回の様な活動が出来ていないのに、横井の時だけと言う事になってしまいますが、あくまで会社を中心とした広い募集に参加するという形で了解願います。

以上

平成7年(1995年)9月3日

TOYP大賞受賞者の功労をたたえた表彰式 = 金沢市内のホテル



中村氏は20期。原稿依頼をしてありましたが...

陶芸の中村さんから表彰

JOC石川ブロック協 TOYP大賞に5人

日本青年会議所石川ブロック協議会の「1995 TOYP大賞」(北国新聞社、北陸放送後援)の表彰式は、日金沢市の金沢全日空ホテルで行われ、出席者約四百人が、さきまな分野で活躍する石川県出身の男女五人の功労をたたえた。

TOYPは「The Outstanding Young Persons」(傑出した若者たちの意味)の頭文字を取って名付けられた。今回は陶芸家の中村元風さん、オペラ歌手の濱真奈美さん、環境保全に力を注いでいる二木太一さん、脚本家の水橋文美江さん、伝統的加賀野菜作りに取り組んでいる米林裕栄さんが受賞した。

授賞式では、小中出佳津(日本青年会議所石川ブロック協議会長)が「若者がそれぞれの個性を生かして役割を果たせば、石川の街は輝き出す。街の活性化を願う意味で、このTOYP大賞を顕彰している」とあいさつした。続いて山形県金沢大学長が十人の審査員を代表して講評し、若本副知事が祝辞を述べた。

前略

秋風がこころ良く、野山に出かけたくなる今日この頃です。さて、過日(九月二十四日)に故横井昭次君の四十九日が、妻裕子さんとご家族の方、大分落ち着いた様子でした。当日、皆様の意向と裕子さんに伝えると共に、応援頂いた方々の横井君の思い入れ深い白山にちなみ「白山会」として、その応援者名簿を手渡し、応援金を裕子さんの口座に振り込んだ旨伝えました。

呼びかけに賛同頂いた方は、二百五十団体及び個人で、総額二百三十八万一千円となりました。これからのご家族の生活に少しでも役に立つと思えます。

金大ワンゲルOBでは、十三期から十七期まで五十一名の参加で五十八万円と目標額の半分以上の応援金が寄せられました。山の仲間の結束を再認識しました。

以上ご報告まで 十五期 宇野 潔